

無を含めて詳細は確認できていない。岩戸山古墳では「別区」から石人・石猪等が出土し、特別な区画と考えられている。扇八幡古墳は墳丘の形態がこの岩戸山古墳と酷似していて、埴輪が示す年代も矛盾がなく、六世紀前半の築造と考えられる。

四 箕田丸山古墳

概要 箕田集落のすぐ西

側、扇八幡古墳と同じ丘陵上に位置する。昭和二十六年（一九五二）、丸山仙之助が土堀用の土を採るために山を削って、前方部の石室を発見した。未盗掘であったため

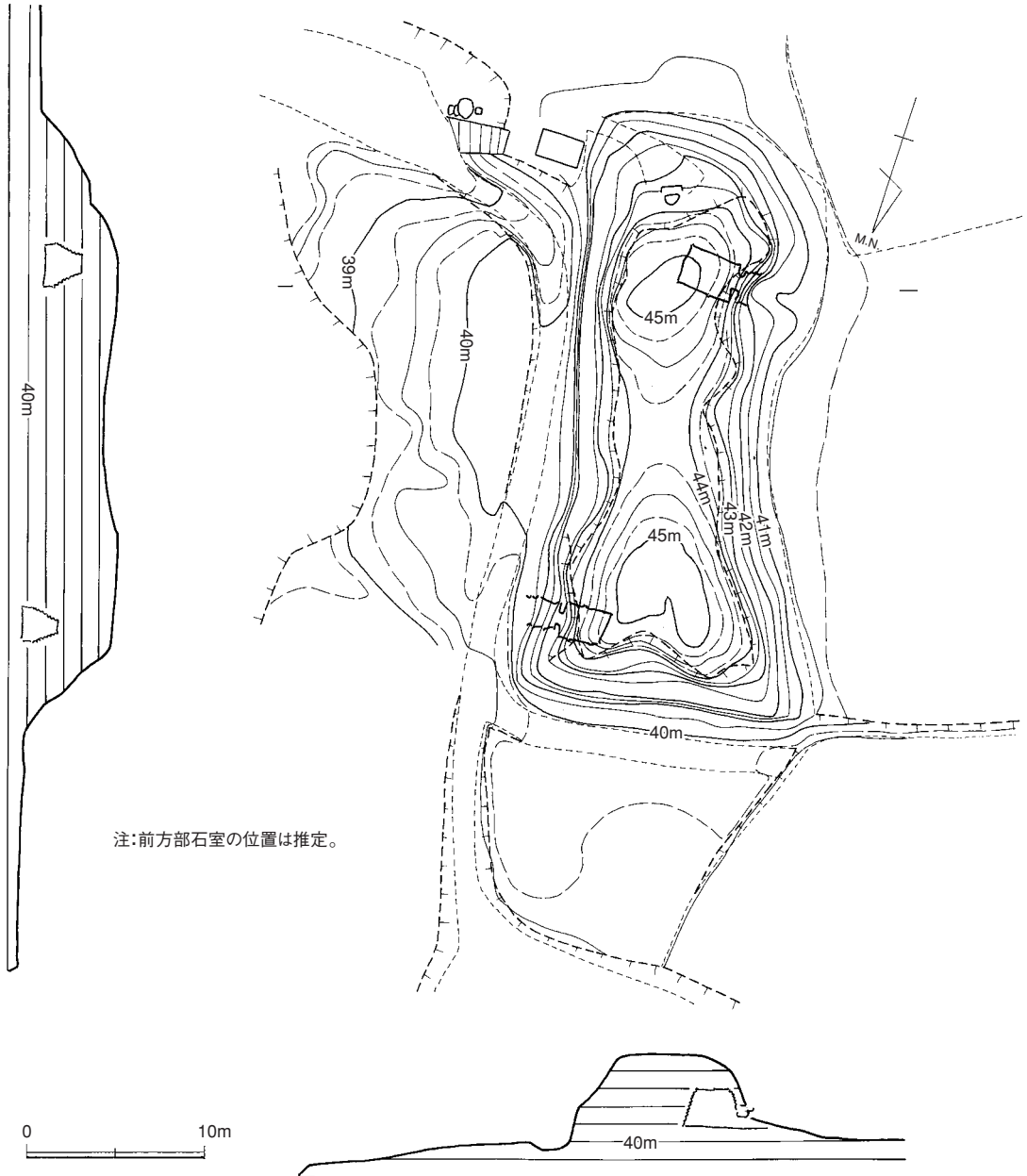


図2—126 箕田丸山古墳墳丘測量図 (1/400)

に豊富な副葬品が出土したが、自宅納屋に保管中に盗難に遭い、九州大学に預けられたがそこも万全ではなかったらしく、結果的に出土品の多くが散逸した。ここで紹介できたのは、小田富士雄らによる発掘当時の資料の収集と報告書刊行によるところが大きい。

墳 丘

丘陵先端部方向、箕田集落に後円部を向けてほぼ南北方向に築造される。後円部南側は畑、東側は荒地、前方部北側も畑となっているがともに平坦地となり、かなり開墾されている。墳丘西裾には里道が走り、その西側はミカン畑となつてわずかに旧地形を残すようであるが、古墳の規模を示すような地形的痕跡は見られない。このように、墳丘周辺は平坦化し、墳丘も裾部で土砂の流出がひどいが、なお前方後円墳の面影を残し、後円部南西付近は旧状を留めるのではないかと思われる。それをもとに復原された後円部径一九メートルという数字は妥当であろう。しかし、前方部先端部は非常に急傾斜となつていて、石室も先端部に寄り過ぎるなど、この部分はかなり削り取られているようである。現段階では全長約四〇メートルほどの規模としておく。なお、墳丘測量中に人頭大の礫や埴輪小片を採集したが、配列は明らかでない。

主 体 部

後円部西側と前方部東側に各一基の単室横穴式石室がある。前方部石室は完全に埋没し、正確な位置は推し量れないが、測量時に前端部付近と考えられる石

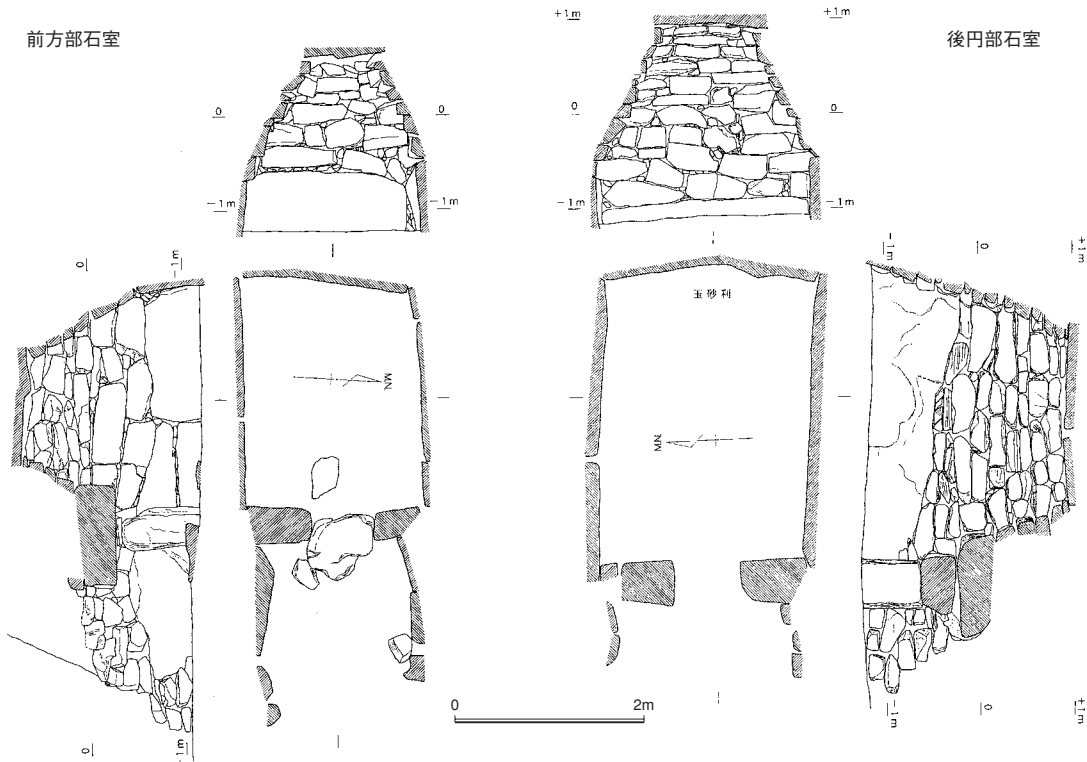


図2—127 箕田丸山古墳主体部実測図 (1/80)

材が確認された付近に推定して書き込んだ。なお、この位置は報告書とは若干ずれている。後円部石室は天井石が一部露出し、腹ばいで入れられるほどの空隙がある。

後円部石室は比較的整った長方形プランとなり、規模は長さ三・一^尺、幅二・二^尺、高さ二・一^尺の規模をもち、奥壁および右側壁は一枚石を、左側壁は二枚石を立てて腰石とするが、それぞれ高さが異なっている。以上は比較的平たい石を内傾させつつ積み上げる。なお、床面には径三^寸五^釐の小礫が敷かれていたと推測されている。出土遺物は不明。

前方部石室は長さ二・四^尺、幅一・八^尺、高さ一・八^尺の長方形を呈し、後円部石室に比べてやや小型となっている。石室の三壁に立てられた腰石は〇・六^尺〇・七^尺と比較的高さを揃え、かつ袖石の高さにも近い数字となっている。腰石以上はやはり比較的扁平な石材を内傾させて積み上げるが、石材は後円部のそれに比べて大ぶりとなっている。また、この石室では石室入口前面の前庭部が、後円部石室に比べて広く造られている。種々の要素が後円部石室→前方部石室の順に造られたことを示す。

出土遺物

前方部石室の奥壁にそって銅鏡・太刀・鉄鏃・玉類が、入口付近の右側に馬具類、両側に須恵器、そして中央部付近で玉類が出土したという。

銅鏡（不明）

現存しないが、小田富士雄による拓本が残さ

れている。直径一^寸一^分三^釐ほどの仿製五獣鏡である。

装身具（一部不明） 銀製耳環四点など計五点、直径一・一^寸九^釐の銀製空玉二一点が残るが、丁字頭を含む勾玉・管玉・小玉などは所在が不明である。

須恵器（不明） 長脚一段透かしの高杯、小型広口壺、長頸化した壺、蓋付き短頸壺、提瓶が記録される。

馬具（一部不明） 轡・鞍金具・杏葉・辻金具・雲珠・小型鈴などが出土したが、多くが失われている。杏葉は楕円形を呈し、蕨手（双葉）文を配するもので桂川町王塚古墳出土品に類似する。鞍金具の一部の磯金具に用いられた唐草文系の文様は冠帽・冠や飾履（沓）にも共通するモチーフである。

武器 朝鮮半島製かと目される単鳳環頭太刀、国産の儀杖用とされる振り環頭太刀三口などを含めて六口の刀（一部不

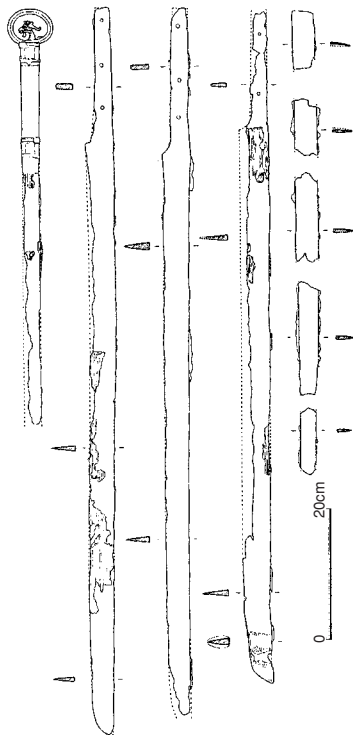


図2—128 箕田丸山古墳出土遺物1

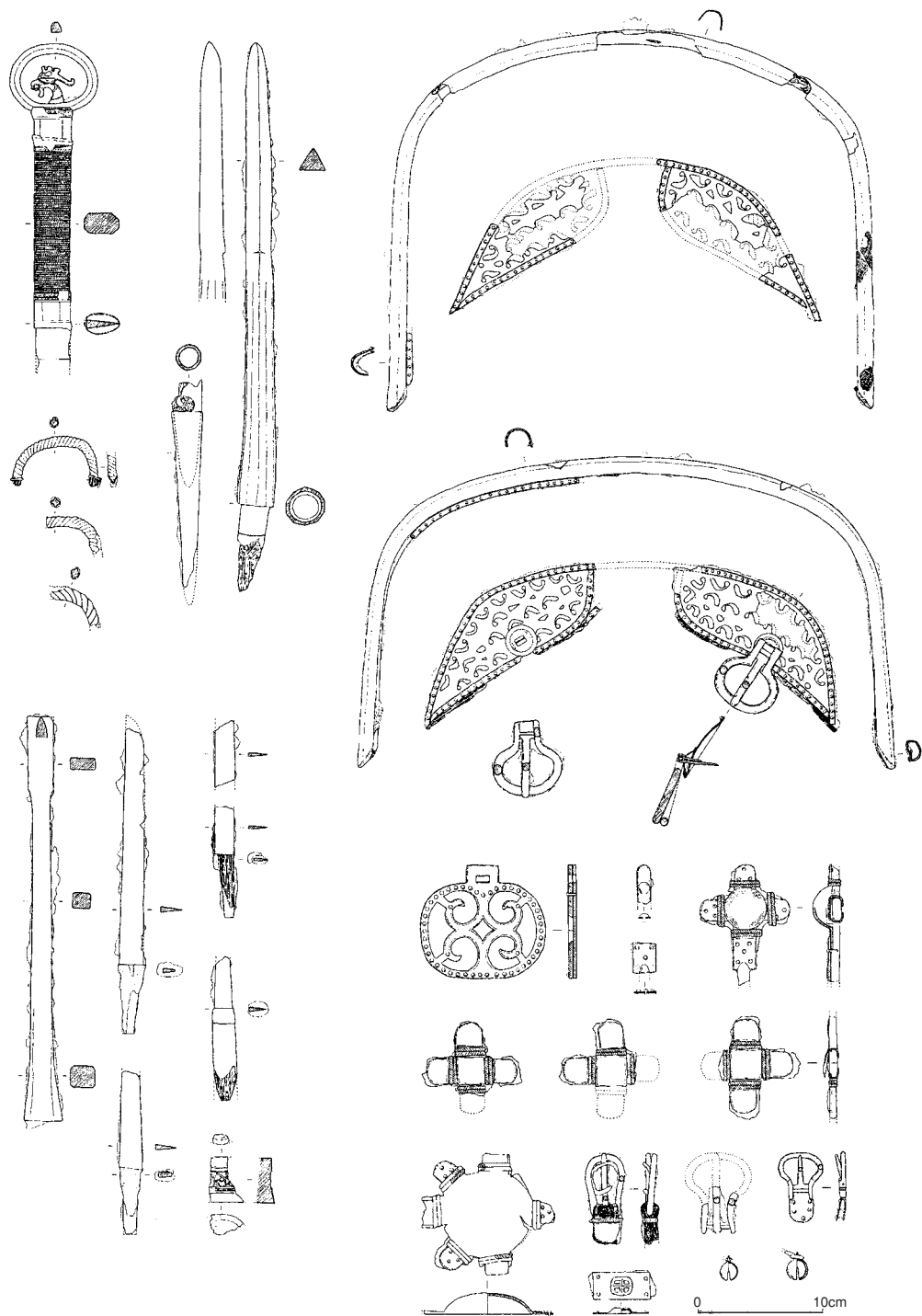


图 2—129 箕田丸山古墳出土遺物 2

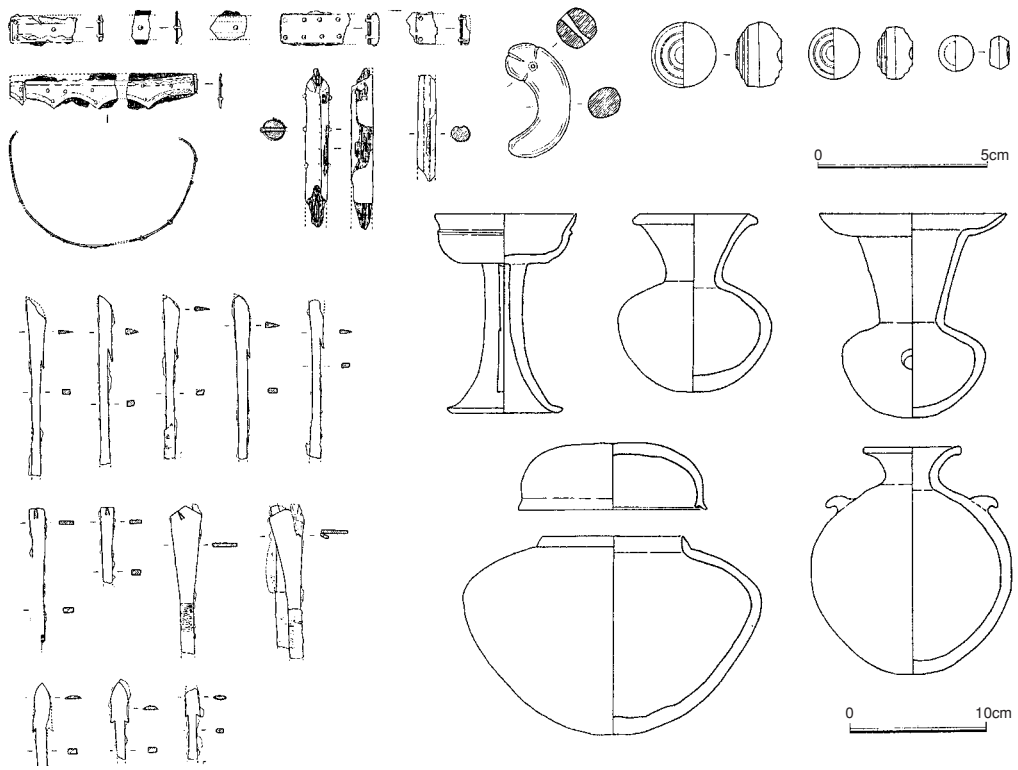


図2—130 箕田丸山古墳出土遺物3

明)、鉄矛一口、鉄鏃、銀箔で飾った弓の一部がある。

武器(不明) 弓矢を盛る胡籥の飾り金具が出土している。

その他 鉄製鑿一点、鹿角装を含む刀子四点、直弧文を刻んだ鹿角製刀装具などがある。

以上が現在判明している内容である。この前方部石室からの出土品は六世紀前半～中ごろの年代を示し、かつ古墳の規模に比して優秀な遺物が含まれていると評価されている。

古墳築造時に造られた後円部石室は前方部石室に比べてやや遡る年代が考えられ、六世紀前半ごろとしてよからう。

(小田富士雄ほか「福岡県京都郡における二古墳の調査—箕田丸山古墳及び庄屋塚古墳」『福岡大学考古学研究室研究調査報告』第三冊、二〇〇四)

五 庄屋塚古墳(町指定史跡)

概要 庄屋塚古墳は下黒田の旧国道沿いに位置する。上黒田から下黒田にかけては低丘陵が南西—北

東にかけてのびるが、ほとんどが宅地化されていて、その中にある小山が庄屋塚古墳である。周辺は宅地が迫り、墳丘もかなり形が改変されている。数年来の懸案であった町による古墳の買い上げが終了したことを受けて、測量調査を実施した。

なお、この古墳はかつて昭和三十九年(一九六四)に小田富士雄らによって前方部石室の調査が実施され、その成果はす